

アトリエ 琉游舎 だより 174号

アトリエ琉游舎 ryuyusha.com/

2024年3月13日発行

琉游舎for healing <https://toi101izuru.wixsite.com/mvsite-3>



- 白鳥や鴨の渡り鳥たちが北へ帰る季節となりました。「鴨帰る」も「白鳥帰る」も春の季語です。「北帰行」も季語かと思っていたら、さにあらず、ヒットした歌謡曲の題名に過ぎず、辞書によっては採用されていない言葉のようです。昭和育ちのわたしは、この時期に渡り鳥が群れをなして飛ぶのを見ると、小林旭の歌った北帰行が頭の中に聞こえてきます。
- コリーナの蓮池では3月になっても鴨たちはのんびりとくつろいでいます。温暖だった今年の冬は鴨にとって快適な環境だったのかもしれませんが。種類によってはこのまま日本で夏を過ごす鴨もいるようなのですが、コリーナの鴨の北帰行はいつのことでしょうか。
- 渡り鳥の帰る場所はシベリア、オホーツク海の向こうロシアの地でしょう。私たちは国境を自由に行き来することはできませんが、渡り鳥には国境がありません。それを自由と鳥たちは感じているのか、異国への海峡を渡るにも許可がいる私たち人間には分かりません。
- 北帰行の原歌は戦前満州にあった旧制旅順高校寮生の愛唱歌でした。失恋の傷心のまま北へ帰るといふ歌だったようです。そういえば津軽海峡冬景色も傷心の歌、北帰行の歌でした。
- 先日歌に唄われた本州の北の果て竜飛岬に行ってきました。人は傷心の時に限らず北を目指すようです。そして北の果てのその先にもまた島や大地が続いていることを知ると、人はまたその北へ北へと向かうのでしょうか。竜飛岬の北にある北海道の山々がこちらにおいでと誘いかけてきます。渡り鳥と同じように人間にも北帰行の本能があるのかもしれませんが。
- この欄を書き始めた頃にはまだ寛いでいたコリーナの鴨がいなくなっていました。北帰行に飛び立ったのでしょうか。雪がまた積もりました。ひと雪ごとに春が近づいてきます。

木 金 土 日

3月・4月スケジュール

3月			4月			
月	火	水	木	金	土	日
			14 映画会 お休み	15	16	17
18	19	20	21 映画会 お休み	22	23 10時半から 春の彼岸会 涅槃会法要	24
25	26 読書会 13時半から	27	28 映画会 13時半から	29	30	31
4月1日	2	3	4 映画会 お休み	5	6	7 写経会 13時半から
8	9 読書会 13時半から	10	11 映画会 13時半から	12	13	14

**彼岸会
涅槃会
法要**
3/23(土) 10時半

読書会
3/26・4/9
(火) 13時半

写経会
4/7 (日)
13時半から

岬の突端にはほぼ例外なく灯台があります。日本にある灯台の総数は分かりませんが、16基に登ることのできる灯台とのか、全てに登ることを目的に灯台巡りをしている人も多いようですが、わたしは灯台に行くことではなく岬の突端に立つことが目的なので、まだ五基を登っただけです。灯台は海上交通の目印になっているため、突端を目指せば灯台まで行くことになります。そこで可能ならば登り無理であれば灯台と一緒に写真を取ることが旅の楽しみのひとつです。突端は大概は断崖絶壁の上であり、その先は大海原が広がっています。波が激しく打ちつけ風が吹きすさぶ荒々しい場所ですが、なぜか神々しい気持ちになります。

突端の向こうには瀬戸内海でもなければ海と地平線があるだけでしょう。海原の向こうに何があるかと船をこぎ出した人が古来より絶えなかった結果、海を道にして人や物が行き交うことができたのです。ましてや突端の向こうに陸地が見えたならば、泳いででも行ってみたいと思うのが人情のような気がします。2月に本州の北端竜飛岬に立ったとき、目と鼻の先に北海道の陸地が連なっている光景は、ここから津軽海峡を渡って蝦夷地に向かった人々の長きにわたる歴史と人々の複雑な感情をわたしに想起させました。本州を追われて絶望のままに渡った人々もいれば、新天地での新たな希望を抱いて勇躍海峡に船をこぎ出した人もいたでしょう。海峡の先にある松前の街は江戸時代は松前藩が置かれ、アイヌとの交易とアイヌ人支配の根拠地となった場所です。またロシアの南下政策に対する江戸幕府の前線基地でもありました。ここから日本人は北海道を經由しオホーツク海を押し渡り樺太の地まで版図拡張、そして今では納沙布岬が海原を挟んでロシアの実効支配する北方領土を渡るに渡れぬ海として臨まざるを得ない突端となってしまっています。

突端には侵略や冒険、逃走や開拓の残影が今でも漂っていると考えると、私が突端に魅かれる気持ちが少しは説明可能なものかもしれません。竜飛岬は長年のアイヌ侵略と表裏である大和民族の開拓の意思が交錯し前進させた場所なのでしょう。私は結果としての侵略や支配の是非について語るすべは持ってはいませんし、それを断罪も肯定もするつもりはありません。ただそこにも、ひとりひとりの願いと意思の総体が永遠のいのちの形で突端に繋がれていることを強く感じずにはられません。歴史や伝承は当時を生きた人々の個々のありようが、絶望や希望を込めて総体として語り継がれてきたものと考えます。それは文献や遺跡が客観的な事実として現れたものを真実として認定する学術的方法論ではなく、信仰や伝説などに形を変えて、支配者の意思ではなく、毎日をそこに生きる人々が永遠のいのちを繋ぐためにここにある事実と考えます。

竜飛岬から少し南下した三厩の街に義経寺があります。源義経は奥州平泉の衣川で自刃したといわれていますが、源頼朝に追われ、龍飛崎まで逃げて荒れ狂う海を前に観音像に祈ると、3頭の龍馬が現れ、海峡を渡ることができたという伝説が残る寺であります。この北行伝説の延長として幕末以降の近代に登場したのが、義経が蝦夷地から海を越えて大陸へ渡り、ジンギスカンになったとする伝説です。ここまでくると荒唐無稽な伝承でしょうから、その真贋を詮索することは無意味だと思いますが、私はそのような伝承が生まれ伝えられていることに、人々の何らかの願いが込められているのではないかと考えます。義経は衣川で物理的な死を遂げた後に、永遠のいのちとなって人々の中に生き続けることを人々が望んだからの伝承なのです。

竜飛岬を渡って蝦夷地に布教に赴いたと伝えられる日蓮聖人の高弟に日持上人がいます。東北や函館・樺太などには、日持にまつわる伝説が残っています。日持が北海道に渡ったとき、それまで見たことも無い魚が大漁に採れた。「法華の坊さん」が来たからということで、その魚を「ホッケ」と呼ぶようになったという伝説や、アイヌ語で大和民族を「シャモ」と呼ぶのは、日持が自らを「沙門」と名乗ったことに由来するという、これらの真偽を確かめようのない伝説があります。恐らくこれらは日持上人というひとりの高名な僧に仮託して、無名の僧たちが各々の布教を皆で繋いで行こうという願いと意志の集約した「行い」の形なのではないかと思えます。未踏の土地に向かうときにはその人の意志と覚悟が錐のように鋭利でなければその地を切り開くことはできないでしょう。竜飛岬は錐の先端のように北海道に向かって鋭利に突端を向けています。ここから未踏の地に向かった無名の数多くの義経や日持たちは、実在の義経や日持上人に自らの行いを仮託して、彼らの行の成就のためにそれらの伝説（永遠のいのち）を繋いだのです。

突端に立つものの覚悟と困難を表したお釈迦様と弟子の富楼那とのやりとりが原始仏典に残っています。富楼那が「お釈迦様、私はスナーパランタで布教したいと思っています」「その人々は攻撃的な面があると聞いている。その地の人々があなたを罵ってきたら、どうするつもりですか？」「もし私を罵ってきたら、この地の人々は良い人々だ、私を殴ったりしないからと思うでしょう」「ではその人々が殴ってきたら？」「この地の人々は良い人々だ、私を棒で殴ったりしないと思うでしょう」（中略）「では刀で切りつけられたら？」「この地の人々は良い人々だ、私を刀で殺したりしないと思うでしょう」「では殺されたら？」「この世界には刀で自分の命を絶つ人もいる。誰かが自分を殺してくれないかと願う人もいる。彼らは私が願わなくても命を絶ってくれた、と私は思うでしょう」お釈迦様は富楼那の覚悟が揺るぎないものと確信し、布教の許可を出したと言うことです。突端に立つと言うこと、そしてその先の世界（未踏の地）に足を踏み入れることの穏やかにして揺るぎのない覚悟が富楼那の言葉にあります。今もここで私が富楼那の覚悟を受け取ることができるのは、今に至るまで無名無数の富楼那たちが繋いでくれた永遠のいのち（覚悟）のおかげです。本州の突端、竜飛岬に立ってその先の世界を目指した無名無数の義経や日持や富楼那たちのいのちが、津軽海峡冬景色の中、わたしのからだを吹き抜けていきました。合掌。